

世界の靴物語 ⑤

文・画 神奈川県企業博物館連絡会顧問 福原一郎

イギリス *chelsea boots* チェルシー・ブーツ

イギリスのロック・グループ、ザ・ビートルズが1966年に来日してから40年になる。

マッシュルーム・カットのヘア・スタイルに襟なしジャケットのスリムなスタイル。靴は爪先から甲へ高く立ち上ったハイライザーという^{くるぶし}踝丈の深靴で、チェルシー・ブーツといわれ当時流行した。

チェルシーとはロンドン南西部の地名で、多くのアーティストたちが住んでいたことからこの名がつけられたという。

はき口両側に伸縮性素材の^{まち}襠を縫い込んだもので、サイド・エラスティック (side elastic) とかサイド・ゴア (side gore) ブーツといわれ、1837年頃ヴィクトリア女王の時代にイギリスで婦人靴が作られている。その後19世紀中頃に紳士の深靴にも用いられ、アメリカに渡って西部開拓時代には保安官や国会議員たちに履かれ、コンGRESS・ゲイター (congress gaiter) またはコンGRESS・ブーツとも呼ばれている。

日本には江戸時代末期に伝わり、坂本竜馬 (1835-1867) が袴姿に履いて有名である。

明治初年、文明開化とともに洋式の靴が履かれるようになり、フロック・コートや大礼服などの礼装用にサイド・ゴアのブーツが用いられ「深ゴム」と呼ばれた。当時は馬に乗ることもあるので、踵に拍車が付付けられるものもあった。

明治、大正、昭和の歴代天皇もエナメル革やキッドの深ゴム靴を御料靴に用いられた。

サイド・ゴアのブーツは19世紀末から世界中で用いられ、さまざまな名称で呼ばれたが、短靴が普及する20世紀の初めには姿を消した。その後も、「昔、おじいさんが履いていた」などと懐かしく語られたりした。

'60年代になってファッションとしてチェルシー・ブーツが若い人たちに好まれて、ドレスアップ用からカジュアルなものまでつくられ、現在でも伝統的なサイド・ゴアのブーツがレトロの波にのって世界中で履かれている。

セルビア *opanka* オパンカ

ヨーロッパ大陸の南東部、バルカン半島の中ほどに位置するセルビアの伝統的な民俗靴オパンカは、古代ギリシャなどの板状のサンダルから足の側面を包み込みシューズの形式へと進化したようなものである。

一枚の厚い底革を成型して、爪先はモカシンのように革を当て後部からひだをとりながら糸で縫い付け、爪先を細く上に曲げたものである。後部には足首に巻き付ける革のストラップがついている。

chelsea boots

チェルシー・ブーツ



4.

イギリス

opanka

オパンカ



4.

セルビア